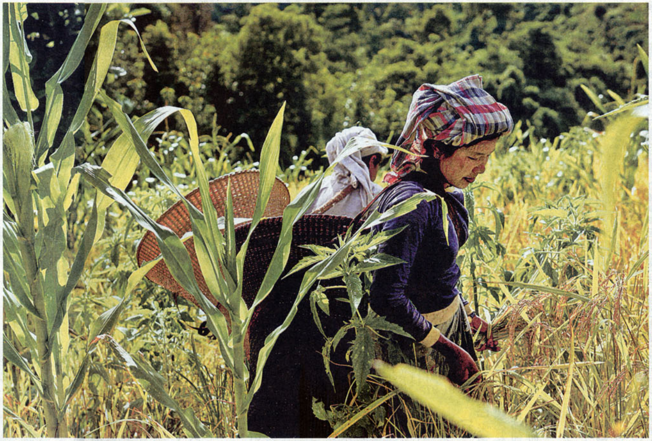
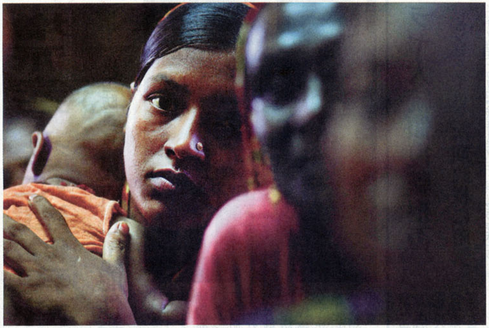
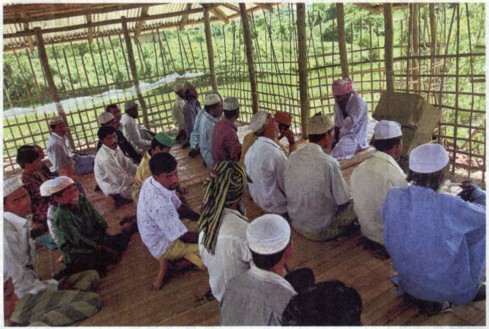
eye

声だせず 生きる道 断たれつつあるジュマ

バングラデシュの先住民


焼き畑に実った陸稲を収穫するジュマの女性。日焼け止めに樹皮の溶液をおしろいのように顔に塗る


先住民族と共存してきたベンガル人も土地収用の被害者だ

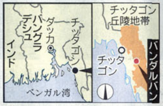

立ち退きさせられた村人のモスクは木とトタンだけで組まれた粗末なものだ

チッタゴン丘陵の町バンダルバンのスアロク地区を見下ろす。傾斜地には立ち退きに遭ったジュマが暮らす

ジュマ（中央）とベンガル人の女性（右端）。やせた体から困窮した生活をうかがい知ることができる

バングラデシュ南東部のチッタゴン丘陵地帯に「ジュマ」と呼ばれる先住民族が暮らす。1971年にバングラデシュが独立して以降、ジュマ独自の伝統や文化は受け入れられず、社会的にも差別され続けている。

丘陵の町バンダルバンの近郊には広大な森が広がる。「この豊かな土地のほとんどは軍に収用された。人が住めないので動物には天国だよ」と案内人は苦笑いした。以前からジュマが暮らすこのスアロク地区の場合、2007年に軍が射撃演習場を造るため約44平方㌔の土地を収用、300世帯以上が立ち退きさせられた。村人は演習場の境界線付近にやせた土地をあてがわれたが、土地なし農民となっては食べていくのもままならない。場内に実る果物を収穫したければ金銭を徴収され、放牧する牛が入ると罰金が科せられる。そんな理不尽な話が沈黙を強いられた村人の口からあふれ出た。



立ち退きさせられた人々にはジュマだけでなくベンガル人も含まれていた。ベンガル人男性が見てほしいと案内した掘っ立て小屋はモスクだった。「前の村には立派な石造りのモスクがあった。今はこんな粗末なモスクで屈辱的だ。イスラムの同胞である軍隊がやったのだからショックは大きい」と訴える。

政府はチッタゴン丘陵地帯へのベンガル人の入植を推進、住民同士の緊張が高まり、ジュマへの人権侵害も多発している。駐留する軍隊を後ろ盾とするベンガル人入植者には逆らえず、声をあげることもできないまま先住民としての生きる道が断たれつつある。

写真・文　渋谷敦志（アジアプレス・インターナショナル）

◆60万人の仏教系先住民◆　人口約1億4000万人のバングラデシュには約60万人の仏教系先住民族がいる。13の部族は焼き畑をする人を意味する「ジュマ」と総称される。1970年代からジュマの土地へのベンガル人入植が進んで対立、武力紛争にまで発展した。

97年に「チッタゴン丘陵和平協定」が結ばれ、政府は先住民に土地返還や軍の撤退などを約束。ジュマ側組織「シャンティ・バヒニ」は武装解除した。しかし和平協定の多くは実施されず、ジュマの間で不満が高まっている。2009年に政権についたアワミ連盟は形骸（けいがい）化していた和平協定の実施を公約に掲げ、平和構築の好機と期待されている。

◆渋谷敦志写真展◆　インドネシア・スマトラ沖の地震・津波による大災害からもうすぐ5年を迎えるのを機に、写真展「悲しみのアチェ」を開催。東京・広尾のＪＩＣＡ地球ひろばで8日（火）から20日（日）まで。月曜休館。入場無料。問い合わせはＮＧＯ「国境なき子どもたち」（03・6279・1126）。